
御降誕八〇〇年のお題目に向かって

—人口減少時代の教化学（平成21～27年）—

はじめに

写真家・吉田功氏は、埼玉で20校以上の廃校やその地域の人びとと交流し、写真に残したが、そのとき感じた驚きを次のように表現している。

広い体育館にたった一人の新生が入る入学式、一、二年生と一緒に学ぶ教室……。老人ホームを訪ねた時には、わずか9人の「全校児童」が地域の30～40人のお年寄りの前で歌や踊りを披露する。その姿に「これが日本の人口構成の縮図か」と息をのんだ。（日本経済新聞 平成27年9月18日）

ことさらに寺院だけが消滅するのではない。わが国の人口構成の推移の前には、学校、小売店をはじめ、病院でさえも消滅していく。

現在、人口減少が深刻な地域では、自治体はもとより、住民、そして新しい生き方を志して都会から来た人たちが協力して、人口減少の流れをくい止めようと努力している。3年程前に訪ねた中部地方の山村では、「30年後も小学校のある村づくり！」をスローガンにかかげ、魅力的な地域再生に取り組んでいた。30年後に、子どもの歓声がひびく小学校が存在していれば寺院も残っているのではないだろうか。

最近、全国各地の教区教化研究会議に参加し、教師の発言に耳をかたむけていると、心に響くことばに接することがある。

「一度でも手を抜いたら、ダメになる」。これは、通夜説教がさかんな教区で、一人の教師が、自分に言いきかすように語ったことばである。分散会参加者の一人ひとりがうなずいていた。

「10軒の檀家でがんばっています」、と強い口調で語った若い教師。いったい、どういう方法でがんばっているのだろう、と内心想ったが、彼は明るく、迷いはなかった。

炎天下、8・6の広島に向かう修行僧の姿は、ただありがたい。
「お寺の近くの休耕田に田植えをしたら、おおぜいの人が参加しました」と、笑って話す若い住職。

宗祖の『事理供養御書』のこぼを思いうかべた。

凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり。(定遺1262頁)

このような志しをもった教師の発言に勇気づけられる。人びとは彼らの志に共鳴し、ひそやかに信仰の輪は広がるのではなからうか。お寺が元気になれば、地域も再生する。

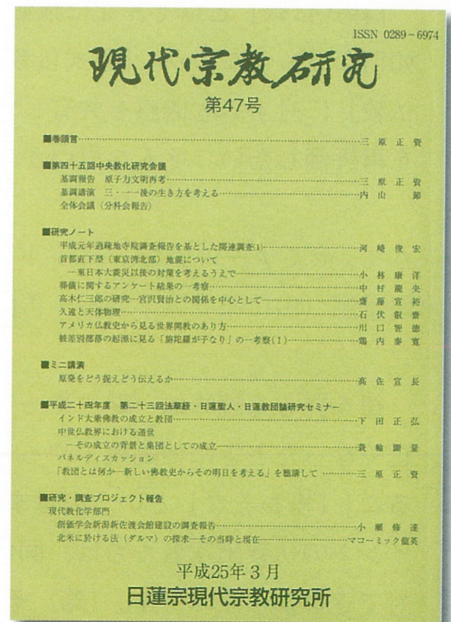
次の一文は昭和4年(1929)頃、柳田国男氏(1875～1962)が述べたことばとして紹介されたものだ。

美しい村が初めからあったわけではない。美しく暮そうという村人がいて、美しい村となったのである。

人口減少時代が始まるとともに、東日本大震災が起これ、それは地方の人口減少問題をいっそうきわ立たせ、東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故は、地域の未来に大きな影を落とした。加えて、戦後70年のこの夏には、わが国の進路を変える安全保障法案が可決された。

乱世ともいべき日本である。そこで問題は、私たちがどのような国のすがた、世界のかたちを求めているか、にあるのではないだろうか。「立正安国・お題目結縁運動」とは、ひとえに一人ひとりの教師の生き方の変化から生まれるのである。

ここ数年間、現代宗教研究所が開催した中央教化研究会議をはじめ、その他の行事では多くの問題が討議された。その一部を紹介したこの冊子が、聖誕八〇〇年を迎える教師の教化活動の参考になることを願っている。



平城25年3月
日蓮宗現代宗教研究所
所報「現代宗教研究」47号